【学力向上フロンティアスクール用中間報告書様式】（小学校用）

都道府県名	大阪府

Ⅰ　学校の概要（平成１５年４月現在）

学校名	堺市立浜寺小学校								
学　年	１年	２年	３年	４年	５年	６年	特殊学級	計	教員数
学級数	２	３	３	３	３	２	１	１７	２７
児童数	７９	８３	９４	８４	８４	７６	２	５０１	

Ⅱ　研究の概要

１．研究主題

基礎・基本の定着と学力の向上を図るため　児童の興味や理解・習熟の程度に応じた複数教員の連携によるきめ細かな指導の実践的研究

２．研究内容と方法

(1)　実施学年・教科

＊　実施学年及び教科を選択した理由
・４，５，６年生・算数
児童の学習意欲や理解の状況に差が出やすい教科、学年であるため。

(2)　年次ごとの計画

平成14年度	○　達成目標 多様な指導方法の有効性 ○　具体的方策 算数指導における抽出児童の決定 算数学力調査(1年次) 浜寺小算数オリンピック 試行的算数科少人数編成授業(等質編成、習熟度別編成、課題別編成等) 算数科発展教材の研究

平成15年度	○　達成目標 児童の変容分析 ○　具体的方策 抽出児童の追跡調査・分析 算数学力調査(２年次) 浜寺小算数オリンピック 算数科少人数編成授業(等質編成、習熟度別編成、課題別編成等)

平成16年度	○　達成目標 研究のまとめと授業のモデル ○　具体的方策 抽出児童の追跡調査・分析 算数学力調査(２年次) 浜寺小算数オリンピック モデル的算数科少人数編成授業 少人数編成授業がもたらした児童の変容分析

＊　平成１５年度からの新規校については、平成１５、１６年度の計画について記入すること。

(3)　研究推進体制

校長・教頭・教務主任 ― 学力推進主担 ― ６年加配教員１名－担任２名
５年加配教員１名－担任３名
４年加配教員１名－担任３名

Ⅲ　平成１５年度の研究の成果及び今後の課題

１．研究の成果

・意欲・関心・態度について

少人数学習支援カード(個人カルテ)を作成し、焦点児童の授業態度等を記録し、指導に活かしていった結果、意欲を高めることができた。

４，５，６年生対象の『少人数学習に関する意識調査』を実施した。６年生では、「自分の力で学習問題を解決しようとしている」が８０％以上あった。「先生や友達の話をよく聞いている」でも、８０％以上あり、「難しい問題にも進んで挑戦している」も８０％あった。

・数学的な考え方について

６年３学期の学習内容である「まとめ」を２学期から計画的に実施し、発展的内容も加味して指導した結果、平成１３年度末に実施した本校独自に作成した算数学力調査と１４年度末実施分とを比較すると、「数理処理」問題において、１０問中８問の正答率が前年度を上回る結果をもたらすことができた。

・計算技能について

「点大臣救出大作戦」と名づけた「小数のかけ算・わり算」のドリル的な学習を算数の時間の終わり１５分に実施した結果、平成１３年度末に実施した本校独自に作成した算数学力調査と１４年度とを比較すると、「計算技能」問題において、５問中５問の正答率が前年度と同じかそれを上回る結果をもたらすことができた。

・知識理解について

平成１５年１１月、４，５，６年生対象の『少人数学習に関する意識調査』では、「勉強の内容がよくわかる」が８０％から９７％の中に4,5,6年の回答があった。

単元終了時のテストや前学年復習問題テスト等において、正答率の高い結果が出ており、他教科の高まりへとつながってきているのではないかと語る教員が出てきている。

・少人数指導と理解・習熟度別について

平成１５年１１月、4,5,6年生対象の『少人数学習に関する意識調査』では、「選んだコースは自分に合っている」が、４年９７％、６年９４％となっており、また、５年の保護者の意識調査では、「少人数学習を知っている」が９６％、「少人数学習に賛成」が９０％、「子どもが意欲的になると思う」が８８％となっており、複数の教員が連携して取り組んでいることに対し、肯定的な結果が出ている。

平成１５年１１月の時点で、６年生の『算数が好き』が６７％に到る結果をもたらした。

・指導者の意識の高まり

少人数学習の成果が見え出して、平成１５年度に１，２，３年でも１単元ではあるが、加配教員の協力で少人数学習を実施したこたや大学の先生の要請等に、指導者の意識の高揚がある。児童の学力向上に自信を持った指導者への高い評価が聞かれるようになってきた。

２．今後の課題

学習内容や児童の実態、指導者の指導観をもとにした「単元別学習集団の編成」表を作成し、本年度の振り返りに役立てることができた。この編成表の作成は、本校のモデル的算数科少人数編成授業作りにも活かすことができると考えられ、より効果的な指導を行うための授業分析等の研究が必要である。

抽出児童の追跡調査・分析においては、指導者間で個の学力などの評価についての情報交換の在り方が研究される必要がある。

少人数編成授業がもたらした児童の変容分析や学力向上の成果を、数値で表現するだけでなく、工夫が必要である。

算数学力調査(２年次)の実施と分析。

地域・家庭とのさらなる協働化。

Ⅳ　学力等把握のための学校としての取組

＊　児童の学習状況の変容を捉えるために、定期的に行っている各種調査などについて、調査の目的、実施内容、時期等を記すこと。

・１学期　前学年復習問題テストⅠ(４～６年)＝知識理解面の定着を見る
意識調査アンケート(児童Ⅰ)＝少人数等の学習に対する意識調査
授業改善・少人数編成替えにも利用

・２学期　前学年復習問題テストⅡ(４～６年)
意識調査アンケート(児童Ⅱ)
意識調査アンケート(保護者)＝少人数等の学習に対する意識調査

・３学期　「浜小パワーアップ算数Ａ」検定試験＝数と計算領域(計算技能)の級の認定
算数学力調査テスト＝計算技能と数理処理問題による学力向上の評価

Ⅴ　フロンティアスクールとしての研究成果の普及

＊　研究会（公開授業）開催
平成１５年１月２０日、本校を会場にして、教育委員会関係者、府下小中学校教員、本校保護者を対象に、公開授業と他のフロンティア校との実践交流会を開催した。
平成１６年２月５日、本校を会場にして、大学・教育委員会関係者、府下小中学校教員、本校保護者を対象に、公開授業を伴う学力向上フロンティア事業の中間発表研究会を開催した。

＊　研究成果普及のためのＨＰ作成、パンフレット作成等の実績（学校としての創意工夫を含む）及び今後の予定
研究冊子や算数科発展問題集等を作成し、研究会時、学校視察時等で配布している。
平成１６年１１月１８日には、公開授業を伴う研究会を開催する予定。

＊　フロンティアティーチャーとしての研究成果普及のための活動実績
フロンティア校や少人数授業に取り組んでいる学校からの講演、指導助言等の要請に、職員を派遣している。

＊　継続校において、研究成果の普及活動の成果（他校への反響等）など
本校児童が進学する中学校への情報発信ができた。

◇　次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。（複数チェック可）

【新規校・継続校】　□１５年度からの新規校　☑１４年度からの継続校

【学校規模】　□６学級以下　□７～１２学級　☑１３～１８学級　□１９～２４学級　□２５学級以上

【指導体制】　☑少人数指導　☑Ｔ．Ｔによる指導　☑一部教科担任制　□その他

【研究教科】　□国語　□社会　☑算数　□理科　□生活　□音楽　□図画工作　□家庭　□体育　□その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】　☑有　□無